「泥沼化する支那事変」　メモ

●盧溝橋事件（昭和12年7月7日）が、なぜ8年間の全面戦争に
▽近衛文麿内閣は「現地解決・不拡大」の方針
　現地では 停戦協定も 結ばれたのに…
▽陸軍だけでなく 近衛内閣にも 楽観的な一撃論
▽「絶対に現地解決」の 国策が 固まっていなかった
　トラブルが続くと 出たとこ勝負
　ずるずる 兵力を増派 事態を拡大させた
▽第一の失敗は「蒋介石軍北上」情報に
　華北へ5個師団派兵（内地3個師団　朝鮮1個師団　満州2個旅団）

参謀本部の判断

「南京政府ヲシテ敗北感ニ基ク屈伏ヲ余儀ナカラシムルト共ニ…却ッテ迅速ナル一撃ニ依リ全面戦ヲ避クルノ結果ヲ期待シ得ヘシ」

▽支那駐屯軍司令官に 与えられた任務（7月27日）
　「平津地方（北京、天津）の支那軍を膺懲して
　　同地方主要各地の安定に任ずべし」
　　作戦地域も 河北省北部に 限定していた
▽28日からの総攻撃で 北京 天津を占領

●「大山事件」で、戦線は上海へ飛び火
▽蒋介石は「最後の関頭演説」（17日 盧山）
　「徹底抗戦」の意志を 明らかにしていた
▽政府は 揚子江沿岸在留邦人（2万9千人）に
　上海引き揚げを命じ 8月9日 完了したが
　夕方 陸戦隊大山勇夫中尉が 自動車で視察中
　　中国保安隊に 運転手と共に 射殺された
▽海軍は 上海陸戦隊を 4千人に増員したが
　5万の中国軍に包囲され 上海は 一触即発状態
▽米内光政海相は 10日 杉山元陸相に
　陸軍部隊の動員準備を要請 閣議も了承した
▽石原莞爾（参謀本部作戦部長）は 反対した
　「華北以外に出兵すれば、全面戦争になる」
　　「上海が危険なら、居留民を全部内地に引き揚げさせたらいい。損害は一億でも二億でも補償しろ。その方が安くつく」
▽結局「上海から先には軍を進めない」を条件に
　居留民保護のため 2個師団派遣に 同意した

近衛　文麿（このえ・ふみまろ）
明治24（1891）～昭和20（1945）東京生まれ。五摂家筆頭・関白家の出。昭和6年貴族院副議長。8年議長に進み、12年第1次内閣を組織。支那事変で13年「国民政府対手ニセス」と声明し解決の道を塞ぐ。枢密院議長を経て15年第2次内閣組織、大政翼賛会を結成し日独伊三国同盟を締結、枢軸外交、南進政策を推進。第3次内閣で日米交渉に努力したが総辞職。戦後、戦犯の出頭命令を受け服毒自殺

蒋　介石（しょう・かいせき）
1887～1975 明治40年日本に留学、陸軍が中国人のために作った振武学校に学ぶ。大正15年国民革命軍総司令となり、中国統一軍事行動を開始。昭和3年国民政府（南京）主席。国共合作を受け入れ、支那事変で対日戦を指導した。戦後、国共内戦を起こし、敗れて台湾に渡る

米内　光政（よない・みつまさ）
明治13（1880）～昭和23（1948）岩手県生まれ。海軍大将。連合艦隊長官を経て昭和12年林内閣海相。近衛内閣にも留任。15年首相に就任したが日独伊三国同盟に反対し陸相辞職で7ヵ月で総辞職。19年現役に復帰し、小磯、鈴木内閣海相となり、終戦に尽力した

杉山　元（すぎやま・はじめ）
明治13（1880）～昭和20（1945）福岡県生まれ。陸軍大将・元帥。陸軍次官、参謀次長、教育総監歴任。昭和12年近衛内閣陸相となり、支那事変拡大を支持した。15年参謀総長。19年小磯内閣陸相。20年本土決戦に備えた第1総軍司令官。敗戦翌月、ピストル自決。「杉山手記」を遺す

華北派兵に反対した米内だったが

華北への陸軍派兵が、上海など華中に波及するのを恐れたのだが、その上海に派兵すれば、全面戦争になるのは火を見るよりも明らかだった。米内の責任を指摘する人もいる。石原は「海軍はずるい。陸軍が強盗なら海軍は巾着切りだ」と怒ったという。

「ひとたび日中抗争に陥れば無限の荒野に進軍命令を出すようなものだ」陸軍では不拡大派筆頭の石原も、華北派兵に踏み切ったのは、「手薄のまま万一包囲全滅させられたら」の軍人の本能、作戦部長の責任感からだった。

●上海では8月13日夕、中国軍が陸戦隊陣地を攻撃
▽閣議も この日 上海への陸軍派兵を承認
▽15日朝「帝国政府声明」を発表
「現地解決・不拡大」方針を 捨て
全面的な軍事行動転換を 明らかにした
実質的には 宣戦布告を 意味するもの

海軍航空隊の渡洋爆撃

中国機が14日、第三艦隊旗艦出雲や陸戦隊陣地を爆撃すると、台北(台湾)から海軍九六式陸上攻撃機の大編隊が暴風雨をついて東支那海を渡り、中国空軍基地を爆撃した。15日からは大村(九州)の九六陸攻も南京、南昌を空襲、中国空軍は2日間の攻撃でほとんど壊滅した。新聞には「荒天の支那海を翔破　敵の本拠空爆」の見出しが躍ったが、発達した低気圧の中、往復2千キロの編隊渡洋爆撃は世界でも初めて。

▽蒋介石は15日 全国総動員令 陸海空軍総司令に
▽「国共合作」も 華北の共産軍(4万5千)を
第八路軍として 国民政府が 弾薬 資金を支給

●9月2日には「北支事変」を「支那事変」に

なぜ宣戦布告しなかったのか

陸海軍が反対だった。風見章(内閣書記官長)の所へ梅津美治郎(陸軍次官)、山本五十六(海軍次官)が来て、「宣戦布告をすれば、外国からの軍需物資の輸

石原　莞爾(いしはら・かんじ)

明治22(1889)～昭和24(1949)山形県生まれ。陸軍中将。昭和3年関東軍参謀。満州事変を起こし、満州国建国を推進。10年参謀本部作戦課長。12年3月作戦部長となり、支那事変不拡大を主張したが、容れられずに関東軍参謀副長に転出。東条と対立、16年京都師団長で予備役

帝国政府声明(8月15日)

「帝国トシテハ最早隠忍限度ニ達シ支那軍ノ暴戻ヲ膺懲シ以テ南京政府ノ反省ヲ促ス為今ヤ断固タル措置ヲトルノ已ムナキニ至レリ」

兵器の呼称

明治、大正時代は「三八式歩兵銃」(明治38年採用)のように年号をつけていた。昭和に入り、昭和の年号で呼ぶと、明治か大正か昭和か分からなくなるので、皇紀の年号を採用することに。

海軍ではゼロ戦(皇紀2600年採用の零式艦上戦闘機)が有名。九六式陸攻は昭和11年(皇紀2596年)採用の陸上攻撃機。

風見　章(かざみ・あきら)

明治19(1886)～昭和36(1961)茨城県生まれ。大阪朝日記者、信濃毎日主筆を経て、昭和5年衆院議員。第1次近衛内閣書記官長。第2次内閣法相。戦後、27年衆院議員(社会党左派)。著に「近衛内閣」

梅津　美治郎(うめづ・よしじろう)

明治15(1882)～昭和24(1949)大分県生まれ。陸軍大将。支那駐屯軍司令官、第2師団長を経て昭和11年陸軍次官。二・二六事件後の粛軍人事を進めた。第1軍司令官、関頭軍司令官を歴任。19年参謀総長。A級戦犯で終身禁固刑。拘置中病死

入が不自由になり、国防力に大穴があく。だから、宣戦布告は真っ平御免だ」

盧溝橋事件の直前、米国から膨大な屑鉄と鋼管を買い付けていたし、石油は米国、蘭印に頼っていた。山本は「艦隊一つ動かすにも油の消耗が気にかかって、ハラハラするくらいだ」

戦時国際法

宣戦布告すれば、交戦当事国の日本と中国以外の第三国は、中立を守らなければならない。そして何よりも米国の中立法(昭和10年8月成立)、交戦国に武器、軍需品の輸出を禁じた法律が、否応なしに発動される。

▽日本の戦争を 生かすも殺すも 米国が握っていた

●支那事変の特徴は、重要物資不足の中の戦争

▽「事変」の呼称 戦争でなく

一事変のレベルに押さえておいて 早く終結

軍事行動に並行し、繰り返し和平の試み

ことごとく失敗に終わったのは、和平をしようというのに、あと一押し、あと一押しと戦線を広げていった。次々と都市を占領すれば、戦果に対する代償が欲しくなる。日本の要求も、軍事行動につられて過大なものとなり、最後まで政略と戦略が一致することはなかった。

●上海の戦いは、最初から大変な苦戦に

▽松井石根大将を軍司令官に 上海派遣軍を編成

第3師団(名古屋) 第11師団(善通寺)を 送ったが

中国軍20万の抵抗は 激しく 海岸に釘づけ

▽9月に 3個師団を増派しても 膠着状態は続いた

▽11月5日払暁 第10軍(3個師団)を

杭州湾北岸に 奇襲上陸させ やっと制圧

苦闘3ヵ月 戦死9,100 負傷31,000

苦戦の最大の原因は情報音痴

堅固な防御陣地を築いていたのに、全く知らなかった。無数に走るクリーク(運河)を利用し、コンクリートで固めたトーチカ、塹壕、鉄条網

山本 五十六(やまもと・いそろく)

明治17(1884)～昭和18(1943)新潟県生まれ。海軍大将。米国駐在武官、航空本部長を歴任。昭和11年海軍次官。14年連合艦隊長官となり、開戦劈頭、ハワイ真珠湾攻撃を立案、実行した。前線海軍基地を視察中にソロモン諸島上空で米軍機に撃墜され戦死。死後元帥。国葬

蒋介石が上海を戦場にしたのは

米英は日本を非難こそしたものの、経済制裁をしてくれない。蒋介石が欲しいのは、言葉ではなく、効果のある具体的な援助だった。米英の権益が集中している上海の戦いで中国の抵抗をアピールし、味方に引き入れようとした。

大山中尉射殺事件にしても、日本の抗議に「警戒線を強行突破し、保安隊員一人を射殺したからだ」と弁明したが、大山は拳銃を携帯しておらず中国側の明らかな挑発だった。

松井 石根(まつい・いわね)

明治11(1878)～昭和23(1948)愛知県生まれ。陸軍大将。ハルビン特務機関長など歴任。昭和10年予備役となったが、12年現役に復帰し中支那方面軍司令官兼上海派遣軍司令官。南京攻略戦を指揮。南京虐殺でA級戦犯となり処刑された

新劇俳優友田恭助の戦死

読売新聞には、敵前100㍍の最前線、従軍カメラマンが、1本残っていた煙草を手渡すと、うまそうに吸う友田伍長の写真が載っている。その直後、クリークに突撃して戦死した。10月5日のことで、召集令状を受けたのは9月1日。妻田村秋子や岸田国士らと文学座を創立する5日前だった。

を配置、中国軍はそこに戦車を集めて戦った。市街地の煉瓦、コンクリの建物も、そのまま要塞となって、日本軍を苦しめた。

風見の話だと「陸軍はあれほど諜報機関に大金を投入しているのに、どうしたというのだ。政治家気取りで国の政治ばかりに頭を突っ込んでいるから、そんなヘマをやるのだ」と非難の声が出たという。

●堅固な防御陣地は、ドイツ軍事顧問団の指導だった

▽日独防共協定(昭和11年11月)を結び
　支那事変でも 日本を支持したドイツだが…

▽ドイツの「親中国路線」一変は ヒットラーが
　昭和13年2月4日 ノイラート外相や。
　ブロンベルク将軍ら 陸軍首脳を更迭
　　外交 国防軍の実権を 握ってから

▽新外相リッベントロップは 日独提携を強化
　中国への武器輸出は 13年5月 全面禁止
　顧問団も 13年7月 全員が 本国に引き揚げた

▽ドイツに代わり ソ連が 中国援助に

支那事変の中国を支えたのはソ連

昭和12年8月21日、中ソ不可侵条約を結び、武器供給の対中国借款も約束した。16年にかけ、ソ連からは飛行機934機、戦車82台、大砲1,114門、機関銃9,720挺、小銃5万挺。砲弾2百万発、弾薬1億8千万発、爆弾3万1,600発に及んだ。

義勇兵の名目で、ソ連人パイロットや整備士450人が送られ、軍事顧問も延べ3,665人に。

●華北でも、戦線の拡大は続いていた

▽8月31日 北支那方面軍を編成
　軍司令官に寺内寿一大将 4個師団を増派

「制令線」は次々と破られた

寺内に与えれた命令は「敵ノ戦争意志ヲ挫折セシメ戦局終結ノ動機ヲ獲得スル目的ヲ以テ中部河北省ノ敵ヲ撃滅スヘシ」戦場と限定した河北省中部は、自然の障害のない平坦地。この線を維持しようとすれば、さらに南を押さ

友田　恭助(ともだ・きょうすけ)

明治32(1899)～昭和12(1937)東京生まれ。本名伴田五郎。築地小劇場で活躍し昭和7年妻田村秋子と築地座を結成。当たり役は「どん底」の役者

岸田　国士(きしだ・くにお)

明治23(1890)～昭和29(1954)東京生まれ。劇作家、小説家。陸士卒業後、東大仏文科に入学。築地座、文学座の指導演出に当たり、戦後も新劇発展に尽くした。

ドイツ陸軍は親中国路線

支那事変当時、ドイツは中国に軍事顧問団を送っている唯一の国。昭和3年、蒋介石の「北伐」(北方軍閥討伐の軍事行動)の時から始まっていた。第1次大戦で敗れたドイツにとって、陸軍将校に実戦の経験を積ませることは国防軍再建の近道だった。フォン・ファルケンハウゼン将軍を団長に30数人が陣地構築の指導、実戦指揮に当たった。日本の抗議に、「個人契約で雇われているのだ。顧問団を引き揚げても、ソ連の軍事顧問が取って代わるだけだ」

鉄鋼産業も、兵器の輸出先が増えるので歓迎した。11年4月には武器を供給する代わり再軍備に必要なレアメタル(タングステンなど)を中国から輸入する契約を結び、1億マルクの借款協定も成立した。中国軍の新式兵器は、ほとんどがドイツ製。毎月香港ルートで6万トンも送られてくる武器・弾薬の6割がドイツからだった

ヒットラー(Adolf hitler)

1889～1945 ドイツ総統。第1次大戦後、ナチ党党首となり昭和8年首相。一党独裁体制を確立、軍備を拡張、対外侵略を強行し14年第2次大戦を起こす。ベルリン陥落直前に自殺。著に「わが闘争」

えねばならず、中国軍の退却戦法もあって、日本軍は河北省南端にまで達していた。

▽大陸は うわばみのように 日本軍を呑み込んだ
11月には 上海戦線9個師団 華北7個師団
陸軍に召集された兵隊は 12年だけで47万人

●戦争の規模は、日露戦争を超えていた
▽前線からは「弾丸不足」を訴える声
貯蔵していた弾丸は わずか8ヵ月分
▽生産力を 軍需に 集中させるには
国民生活を 統制する必要が 出てきた
▽10月25日 企画院が設立され
「物資動員計画」(物動)が 動き出す

●政府の言論統制も迅速だった
▽近衛首相は 7月11日(北支派兵の政府声明を発表)
マスコミ代表44人を 官邸に招き 協力を要請

7月31日には新聞紙法第27条を発動

「軍機、軍略に関する報道は一切これを禁じ、陸海軍大臣から予め許可を得たるものに限り除外す」 兵力、将来の作戦を予想させるような記事はダメで、新聞は伏せ字だらけ。

写真も「陸軍省検閲済」のスタンプが必要。戦車は大砲部分が消されてノッペラボー。口径、砲身の長さから、性能が分かるという理由。

陸軍省は8月3日、特派員に「陸軍従軍記者」の名称を与え、将校並みの待遇を付与したが、これも日露戦争以来のことだった。

▽9月25日には「内閣情報部」を設置

内閣情報部

情報官には多数の現役軍人が就任し、陸海軍・内務・外務各省の事前検閲に加えて事後検閲と、二重の検閲を行ない、記事掲載の可否だけでなく、編集方針にまで踏み込んで指導した。

第2次近衛内閣の15年12月、専任職員144人を擁する内閣情報局となり、国家的報道・宣伝の一元的統制機関として言論界に君臨する。

リッベントロップ(Ribbntrop)
1893～1946 ドイツ・ナチ党の外交を主導し昭和13年外相。独ソ不可侵条約、日独伊三国同盟を締結。戦後、絞首刑に

寺内 寿一(てらうち・ひさいち)
明治12(1879)～昭和21(1946)山口県生まれ。陸軍大将・元帥。長州閥・正毅元帥の長男。昭和11年二・二六事件後広田内閣陸相。12年北支那方面軍司令官。16年南方軍総司令官。シンガポールで病死

国内は「戦時色」一色に

近衛内閣は8月24日、「国民精神総動員運動」実施要綱を決め、鳴り物入りでスタートさせた。「挙国一致」「尽忠報国」「堅忍持久」をスローガンに、神社への武運長久祈願、勤労奉仕、生産増強、愛国公債購入、貯蓄報国を呼び掛け、議会も出征将兵感謝決議をし、事変の費用10億2千万円を可決した。

銀座4丁目交差点では女性が千人針に協力を求め、慰問袋も1年間に陸軍省に209万個も寄せられた。映画の始めには、8月から「銃後を護れ」などのスローガンが義務付けられた。

新聞は戦況を1日3回も号外で速報、「今や断固として膺懲を加えよ」とか「今は只一撃あるのみ」と国論を戦争へ向けて統一していった。

海軍省発表(8月23日)

我が○○、○○艦隊は陸軍の○○○○○を護衛し今二十三日早朝陸海軍の緊密なる共同作戦を以て○○方面に敵前上陸を敢行し成功裡に陸軍○○○○○の上陸を見たり

陸軍部隊上海派兵を報じたもので、見出しも「○○で激戦」。わずかに「上海特電」で上海と分かる。

●国民世論を戦争協力に纏めたが…

▽近衛の憂鬱は 軍部の作戦計画が 分からないこと
　海軍渡洋爆撃も その日 閣議があったのに
　何の報告もなく 翌日の新聞で 初めて知った

▽軍部は 統帥権を盾に 軍事行動については
　政府に 何も知らせず 独断で進めようとした

▽政府は 外交方針 財政計画の 立てようがない

7月27日の閣議で

近衛は、内地師団の華北派兵を決めた閣議で拓務相に聞かせた。「陸軍は大体どの辺で軍事行動を止めるのか」杉山陸相は黙ったまま答えない。陸軍は、政党出身閣僚から軍の機密が洩れることを嫌っていた。米内海相が「それは永定河と保定の間で止める予定だ」杉山は声を荒げて「こういう所で、そういうことを言っていいのか」たしなめる閣僚はいなかった。

▽近衛は 天皇にすがった
　「一国の首相が軍の計画を知らされないのでは、
　国務の計画、実施が出来ません」

▽天皇は「閑院宮参謀総長から上奏があった時は、
　それを自分から首相と外相に伝えよう」

▽戦争という 国家に 一番大切な問題で
　国務と統帥が乖離 離れ離れになっている
　これが 昭和日本の実情 太平洋戦争の敗因に

日清、日露戦争は、なぜうまくいったのか

明治憲法は、天皇が統治権を総攬する形で政治と軍事が統合されている。しかし、輔弼機関が国務事項は国務大臣、統帥事項は参謀総長、軍令部総長と分かれている。昭和に入ると、軍部の勢いそのままに軍事優先、調整・統合がうまくいなかいという憲法の欠陥が出てきた。

日清、日露戦争の時は、元老・首相の伊藤博文が大本営の御前会議に出席し、外交・軍事の調和、政略と戦略の一致を図った。

●近衛は「首相を構成員とする大本営」を働き掛けた

大本営

戦時の天皇直属の最高統帥機関。明治26年の

初仕事が国民的行進曲の募集

内閣情報部は流行歌が軟弱だと、戦意高陽のため勇壮な軍国調の曲を公募した。5万7,538編の応募があり、一等総理大臣賞・銀杯・賞金5千円は「見よ東海の空あけて 旭日高く輝けば」で始まる「愛国行進曲」だった。

鳥取県で印刷業で営む23歳・森川幸雄の作詞で、作曲は瀬戸口藤吉。藤山一郎、四家文子、長門美保らのレコードは100万枚を超える大ヒットに。

出征兵士の見送りでは「勝って来るぞと勇ましく…」の「露営の歌」(古関裕而作曲)が盛んに歌われた。東京日日、大阪毎日の2等当選歌で発売半年で60万枚を超えた。

ＮＨＫは、時局番組にテーマ曲を流すことになり、放送第1回は信時潔作曲、大伴家持の「海行かば」。やがて戦局悪化で玉砕報道のテーマ曲に。

瀬戸口　藤吉(せとぐち・とうきち)

明治1(1868)～昭和16(1941) 鹿児島県生まれ。明治15年海軍軍楽隊に入り、指揮者・隊長に。33年「軍艦行進曲」を作曲し、創成期の洋楽普及にも尽力した

古関　裕而(こせき・ゆうじ)

明治42(1909)～平成1(1989) 福島県生まれ。本名勇治。昭和6早大応援歌「紺碧の空」で認められ「若鷲の歌」「ラバウル海軍航空隊」を作曲。戦後はラジオドラマ主題曲「君の名は」や「とんがり帽子」などを作曲、歌謡曲界をリードした

信時　潔(のぶとき・きよし)

明治20(1887)～昭和40(1965)大阪生まれ。大正9年ドイツ留学、12年に帰国、東京音楽学校作曲科教授。日本の民謡・古謡を取り上げた。昭和38年文化功労者

戦時大本営条令で法制化され、日清、日露戦争で宮中に設置された。日清戦争の時、会議の構成員は参謀総長と軍令部長、同次長だったが、伊藤首相が明治天皇に願い出て陸奥宗光外相と共に勅命で出席した。

▽陸軍は「大本営は戦争の時に設置するもの」
消極的だったが 北支那方面軍に続いて
11月7日 中支那方面軍編成（上海派遣軍と第10軍を統合）
「二つの方面軍統帥には大本営が必要だ」
▽11月20日 大本営令により
事変でも 設けられるようにして 宮中に設置
しかし「首相参加」には 陸海軍とも反対
▽代わりに「大本営政府連絡会議」
政戦両略にわたる 重要案件については
必要に応じて 関係閣僚と統帥首脳の会議
▽近衛の要求を 体よくあしらう 形式的会議
作戦計画が 知らされることは なかった

●戦時内閣強化に「内閣参議」制度
▽10月15日 10人を任命
陸軍から 宇垣一成 荒木貞夫
海軍から末次信正 外交界から松岡洋右
▽各界の勢力均衡人事 週1回 近衛と昼食会
決議するわけでもなく せいぜい 進言する程度

緒方竹虎の言葉
威容を張ることの好きな、いわゆる関白好み

▽近衛には 改造に備えた 人材プールの狙いも
12月 内相が病気辞任すると 後任に末次

牛場友彦（首相秘書官）の言葉
近衛さんは、人事だけが総理の自由と言っていた。他のことはともかく、人事については人の言うことを聞かなかった。しかも、アッと言わせようという気持ちがあったから、末次を内相に持ってきたりしたんだ。ともかく、複雑な人だった。

▽末次は 陸軍顔負けの 強硬論で
近衛内閣を 引っ張っていくことになる

伊藤 博文（いとう・ひろぶみ）
天保12（1841）～明治42（1909）山口県周防生まれ。元老。明治18年内閣制度を創設し初代首相。4次にわたり内閣を組織し、明治憲法を制定。33年立憲政友会を設立し総裁。38年初代韓国統監となり、ハルビンで安重根に暗殺される

宇垣 一成（うがき・かずしげ）
明治1（1868）～昭和31（1956） 岡山県生まれ。陸軍大将。陸軍次官を経て大正13年清浦内閣陸相となり加藤・若槻・浜口内閣に留任、4個師団廃止の宇垣軍縮を実施。昭和6年朝鮮総督。12年1月組閣の大命を受けたが陸軍が陸相を送らず断念。13年近衛内閣外相兼拓務相。戦後28年参院選全国区に最高点当選

荒木 貞夫（あらき・さだお）
明治10（1877）～昭和41（1966）東京生まれ。陸軍大将。昭和6年犬養内閣陸相。精神主義的言動で皇道派の中心に。二・二六事件で予備役。13年近衛内閣文相。A級戦犯で終身禁固刑。29年仮出所

末次 信正（すえつぐ・のぶまさ）
明治13（1880）～昭和19（1944）山口県生まれ。海軍大将。昭和3年軍令部次長。ロンドン海軍軍縮条約に強硬に反対。8年連合艦隊長官に就任し、艦隊派総帥に。12年近衛内閣参議を経て内相

松岡 洋右（まつおか・ようすけ）
明治13（1880）～昭和21（1946）山口県生まれ。外交官、満鉄副総裁。昭和5年政友会代議士。8年国際連盟総会で満州国否認に抗議して退場、国民的英雄に。15年近衛内閣外相。日独伊三国同盟、日ソ中立条約締結。戦犯で起訴されたが病死

●上海作戦後、首都南京を攻略するかどうか

▽国民政府は 11月16日「重慶遷都」を宣言

▽中支那方面軍は 一路 南京を目指していた

参謀本部の「蘇州で止まれ」の指示は

南京一番乗り 功名争いに 破られていった

参謀本部の陣容も大きく変わっていた

参謀次長に多田駿中将。石原作戦部長は関東軍参謀副長に転出(9月)、下村定少将が後任に。拡大派筆頭の武藤章作戦課長は中支那方面軍参謀副長(10月)、作戦課長は河辺虎四郎大佐。

▽武藤は 南京攻略を強硬に主張 下村も支持

多田は「敵国の首都攻撃は、単に軍事的観点だけではなく、政治的配慮も必要だ」

▽12月1日 ついに 南京攻略命令

10日から総攻撃 13日 南京占領

日本国内は大変なお祭り騒ぎ

国会議事堂にはイルミネーションが輝き、全国各地で昼は旗行列、夜は提灯行列。12月公演が行なわれていた歌舞伎座では「忠臣蔵」大詰めの場面になると、役者、観客が一緒になって「南京陥落万歳」を叫んだ。

●「南京虐殺事件」が起きていた

▽東京裁判では「30万人」「せいぜい3万か4万だ」

「虐殺そのものがなかった」今でも論議

義和団事件で日本軍は称賛された

明治33年6月、義和団が民衆を動員、北京の各国公使館を包囲、攻撃した時、連合軍を編成して解放した。各国軍隊の掠奪、暴行が横行した中で、日本軍は規律正しく、勇敢だった。「信頼出来るのは日本軍だけだ」と称賛された。中国人は競って軒下に日の丸旗を掲げた。「この家には日本軍がいると、掠奪されないだろう」

▽激戦で戦友を失い 便衣隊にも 悩まされていた

▽遮二無二に 進撃したため 補給が追い付かない

現地調達で やっと 食糧を手に入れたが

銃剣の力で 否応なしに 取り立てたものだった

緒方 竹虎(おがた・たけとら)

明治21(1888)～昭和31(1956)山形県生まれ。朝日新聞編集局長、副社長を歴任し、昭和19年小磯内閣国務相。27年吉田内閣官房長官。29年自由党総裁。保守合同後の自民党総裁と目されたが急逝

牛場 友彦(うしば・ともひこ)

明治34(1901)～平成5(1993) 東京生まれ。三菱石油勤務ののち昭和12年第1次近衛内閣秘書官。戦後、日本輸出入銀行幹事。駐米大使を務めた牛場信彦の兄

多田 駿(ただ・はやお)

明治15(1882)～昭和23(1948)宮城県生まれ。陸軍大将。昭和12年8月参謀次長。第3軍司令官、北支那方面軍司令官歴任

下村 定(しもむら・さだむ)

明治20(1887)～昭和43(1968)高知県生まれ。陸軍大将。昭和12年参謀本部作戦部長。西部軍司令官、北支那方面軍司令官歴任。戦後、陸相として陸軍解体に当たった。34年～40年参院議員

武藤 章(むとう・あきら)

明治25(1892)～昭和23(1948)熊本県生まれ。陸軍中将。昭和12年参謀本部作戦課長。14年軍務局長となり、日独伊三国同盟、大政翼賛会を推進。19年第14方面軍(比島)参謀長。A級戦犯で処刑される

河辺 虎四郎(かわべ・とらしろう)

明治23(1890)～昭和35(1960)富山県生まれ。陸軍中将。昭和12年参謀本部戦争指導課長を経て作戦課長。第2航空軍司令官、航空本部長。20年参謀次長

「外国人の見た日本軍の暴行」

ティンパーレー(英マンチェスター・ガーディアン記者)は書いている。

上に立つ指揮官の姿勢

日露戦争の時は、乃木希典（第3軍司令官）も東郷平八郎（連合艦隊長官）も、常に捕虜、非戦闘員の扱いに心を配っていた。乃木は旅順総攻撃のたびに、必ず各部隊に治安を守る憲兵を用意させた。この指揮官の姿勢が、軍隊の姿勢になった。

南京攻略戦では「捕虜に食わせるものなんかないから捕虜は取るな」「殺せ」と言った師団長がいたという。

松本重治が「上海時代」に書いている

18日午後の慰霊祭が終わった時、松井大将（軍司令官）が突然立って将兵に訓示を始めた。「お前たちは、せっかく皇威を輝かしたのに、一部の兵の暴行によって、一挙にして皇威を墜してしまった」泣きながらも凛として将兵を叱っている。「何たることを、お前たちは、してくれたのか。皇軍としてあるまじきことではないか。お前たちは、今日より以後は、あくまで軍紀を厳正に、絶対に無辜の民を虐げてはならぬ。それが、また戦病没者への供養となろう」

松本は同僚から「日本軍の進撃が早かったのは、将兵の間に『掠奪・強姦勝手放題』の暗黙の了解があったからだ」と聞いて、憤慨していたから「松井さん、よく言ってくれた」深堀遊亀中佐（方面軍報道部長）に「日本軍の暴行、残虐は、今世界に知られているんだ。日本軍の名誉回復のためにも松井大将訓戒のニュースを世界に流したい」参謀から反対が出たが、深堀が「参謀が何と言おうと構わない。報道部長の責任において許可する」

松本は東京へ打電、ロイター通信や英字新聞への配信を依頼した。翌朝、その記事は香港の英字新聞に短いながらも掲載されたという。

●南京攻略をしなかったら…

岩永裕吉は「ビスマルク的転換を」

普墺戦争（1866）の時、プロシア首相ビスマルクは、ウィーン攻略を目前にしながら、包囲し

「南京撤退の際の中国政府および中国軍隊の秩序は紊乱していた。多くの人々は、日本は従来とも秩序と組織誇る国家であるから、日本軍の南京攻略にあっても、妙なことはあるまいと安心し、また戦争の緊張、空爆の危険も近く終わるものと考えていた。ところが、日本軍の入城二日間にして我々の希望は、無残にも破れてしまった。絶えざる虐殺、大規模な計画的掠奪、家宅侵入、婦女凌辱など一切は全て無統制であった。外国人居留民は事実その目で、路上に充満する死体を見た。南京中区では、辻ごとに必ず一個の死体が転がっていた。その大部分は十三日午後か夜間、日本軍の入城時に銃殺もしくは刺殺されたものである」

松本　重治（まつもと・しげはる）

明治32（1899）～平成1（1989）大阪生まれ。昭和7年新聞聯合（のち同盟通信）上海支社長。15年同盟通信編集局長。27年に国際文化会館を設立し専務理事、理事長。51年文化功労者。著に「上海時代」

松井は死刑判決を受けて

花山信勝（東大教授）に「南京事件ではお恥ずかしい限りです。日露戦争の時、大尉として従軍したが、その当時の師団長と、今度の師団長などと比べて見ると、問題にならんほど悪いですね。日露戦争の時は、シナ人に対しては勿論だが、ロシヤ人に対しても、俘虜の取扱い、その他よくいっていた。今度はそうはいかなかった。慰霊祭の直後、私は皆を集めて軍総司令官として泣いて怒った。ところが、このことのあとで、皆が笑った。甚だしいのは、或る師団長の如きは『当り前ですよ』とさえいった。従って、私だけでもこういう結果になるという

たままで入城せずに和平を結んだ。これを徳としたオーストリアが普仏戦争(1870～1871)でプロシアに味方、ドイツ統一に結びついた。岩永は「この故知に日本は習うべきだ」

▽後藤隆之助は 11月中旬 上海視察へ
松本重治(同盟通信)から 説得された
「南京占領が日本軍のゴールとなってきているが、南京を占領したって何にもならない。中国側は長期戦を覚悟して、日本軍を奥地に誘い込む作戦なのだから、城下の盟というような大時代的な芝居は成立しない。南京まで行かないうちに兵を停め、和平交渉に徹するりほかに、日本を救う道はない。際限なき泥沼戦争となるのは必定だから、是非近衛さんに直言して欲しい」

▽後藤は 急いで帰国 11月26日 都ホテル(京都)で
近衛に「南京占領を差し控え、和平交渉を」

▽近衛の返事は「君の話はよく分かる。僕も同感だが、今となっては何とも仕様がない」

▽後藤は戦後「なぜあの時、もっともっと近衛に食い下がって、南京攻略を阻止する決意をさせなかったのか。千載の恨事である」

●南京攻略戦の最中、「トラウトマン工作」

▽トラウトマン(ドイツ中国大使)を仲介に 和平工作
日本の和平条件が 蒋介石に届き
実現の可能性の 高いものだった

▽10月1日 四相会議(首相、外相、陸海相)は
事変早期終結のため 第三国の斡旋
特に ドイツに期待する方針を 決めた

▽馬奈木中佐は 10月下旬 オットと中国に渡り
トラウトマンと会見 感触を確かめ 帰国した

▽ドイツが 日中調停に 乗り出したのは
事変拡大は ソ連を利するだけであり
日本が 国力を消耗すれば
米英の牽制にも 役立たないとの判断

●広田弘毅外相は11月2日、駐日大使ディルセンを招き日本の和平条件7項目を伝えた

ことは、当時の軍人達に一人でも多く、深い反省を与えるという意味で大変に嬉しい」

花山　信勝(はなやま・しんしょう)
明治31(1898)～平成7(1995) 石川県生まれ。仏教学者。昭和14年東大助教授となり21年教授。戦犯の日本側教誨師。著に「平和の発見－巣鴨の生と死の記録」

岩永　裕吉(いわなが・ゆうきち)
明治16(1883)～昭和14(1939)東京生まれ。大正15年新聞聯合専務理事。昭和11年同盟通信初代社長。蘭学医・長与専斎の四男。又郎(東大総長)の弟、善郎(作家)の兄

後藤　隆之助(ごとう・りゅうのすけ)
明治21(1888)～昭和59(1984)茨城県生まれ。京大在学中に近衛と親交を結び、近衛が将来首相になった時にと、昭和8年、学者、ジャーナリストで国策研究機関「昭和研究会」を設立し近衛のブレーンに。近衛内閣で組閣参謀を務めた

「トラウトマン工作」の発端

石原は9月中旬、「外交交渉により解決するしかない」と、馬奈木敬信中佐(参謀本部情報担当、のち中将)に、ドイツによる斡旋工作を依頼した。馬奈木は昭和4年の駐独武官補佐官時代、外務省アジア局長のトラウトマンと面識があった。オット少将(駐日大使館付武官)に接触、斡旋の糸口を探っているうちに日本側に外交解決の動きが出てきた。

オット(Eugen Ott)
1889～1976　ドイツ陸軍少将。昭和9年駐日大使館付武官。13年大使となり、日独伊三国同盟を推進。ソ連スパイ・ゾルゲとの親交から17年解職された

日本側の和平条件

①内蒙古自治政府の樹立②華北での非武装地帯の設定と親日的行政長官の任命③上海非武装地帯の設定④反日政策廃止⑤共同防共⑥日本商品への関税引き下げ⑦外国人諸権利尊重

▽広田は「戦争が継続される場合には、
この条件ははるかに加重されるだろう」
▽ディルクセンも「これなら、
国民政府も面目を失わずに受諾できる」
▽蒋介石は すぐは 動かなかった
▽11月3日から ブリュッセル(ベルギー)で開催の
「九ヵ国条約会議」に 期待をかけた
▽会議で 中国は「対日経済制裁、中国への援助」を
要求したが 具体的成果のないいま 24日閉幕

●蒋介石は12月2日、日本側条件受け入れを表明
▽トラウトマンに「和平を討議する基礎として」
「日本は信用出来ないが、ドイツの誠意は信じている。本国政府に、終始公平な仲裁者として徹底して貰うこと、華北の蒋介石政権の主権が絶対に維持されること。二点を要請して欲しい」

蒋介石が招集した幹部会議では

「もし、これだけの条件なら、一体何のために戦争しているのか分からない」の声も。蒋介石も「亡国的条件ではない」と受け入れる覚悟。

▽回答は 7日 ディルクセンから 広田外相に
▽すでに 南京攻略命令が出ており
陸軍だけでなく 政府にも 蒋介石と交渉無用論
▽広田は「最近の情勢の変化により、先に示した条件は最早交渉の基礎となし得なくなった。和平の条件については、改めて陸海軍とも協議の上で提示したい」
▽海軍軍令部暗号班は 中国外交部が
在外大使に宛てた 極秘電報を 盗聴し解読
明らかに 蒋介石の弱気を 示していた

●12月14日、講和条件再検討の連絡会議
▽南京陥落の翌日 戦勝気分 いっぱいだった

広田　弘毅(ひろた・こうき)

明治11(1878)～昭和23(1948)福岡県生まれ。ソ連大使を経て昭和8年斎藤内閣外相。岡田内閣にも留任。11年首相に就任、日独防共協定締結。12年近衛内閣外相。東京裁判で文官中、ただ1人絞首刑

九ヵ国条約会議

ワシントン会議(大正10年11月)では、海軍軍縮のほか中国問題が議題となり11年2月6日、「中国の主権と領土保全を尊重する」と誓った条約が、会議参加の日本と英米仏伊、ベルギー、オランダ、ポルトガル、中国で調印された

中国の在外大使宛極秘電報

(12月3日付) 独国大使ハ本国政府ノ命ニヨリ日本側ノ停戦講和要求ヲ転送シ来レリ　我方ハ至急之ヲ決定セザルベカラズ　列国ハ我ヲ援助シ得ルト云フモソノ程度ニ至リテハ今ニ確実ナル表示ナシ　速ニ駐在国当局ニ対シ確実ナル返答ヲ与フル様請求相成度シ　抗日戦線ハ実ニ各国ノ後盾ニヨルモノナルニ付　列強ガモシ十分ナル援助我ニ与フレバ我ハ極力抗戦セン　若シ然ラズトセバ速ニ明カニ其ノ旨ヲ告ゲ　我ヲシテ最後ノ決定ヲナサシメ　以テ今回独国斡旋ノ好機ヲ誤ルコトナカラシムベキナリ
又独逸大使ガ転達セル七ヵ条ハ此レ友邦ノ範囲ノモノニシテ　決シテ接受セザルベカラザルモノニアラズ
右注意ヲ乞フ

大本営政府連絡会議のやりとり

最初の原案を支持する者は少なく、賠償金支払いなど新たな要求が加わった。それでも末次は「かかる条件で国民は納得するかね」と反対、米内に「海軍は、こんな寛大な条件でいいの

▽蒋介石が 応ずるかどうかは 問題でなくなった
南京攻略は「力でねじ伏せられる」の幻想
▽21日の閣議決定では 満州国正式承認 賠償金
華北・内蒙古を 半ば 独立の状態に置いて
華中一定地域と共に 保障占領が加重された
▽説明役の石射猪太郎(外務省東亜局長)は
「これは明らかに、中国に降参を強いるものではないか。とうとう陸軍案におわる」
▽事変を 早く終わらせるための
「トラウトマン工作」だったのに
戦争を止めるには「取れるものは取れるだけ」
▽広田は 22日 ディルクセンに 新条件を提示
「先の条件とは大きな相違があり、
これでは中国側が受諾する見込みは薄い」
▽回答期限前日 昭和13年1月14日「日本の要求は抽象的だから、さらに詳細な内容を知りたい」

●15日の連絡会議は、交渉打ち切りの政府側と、継続を主張する参謀本部の間で、一日中激しい論争に
▽広田「長い外交官生活の経験から見て、引き延ばし戦術であり、和平解決の誠意のないのは明らかだ」杉山「蒋介石を相手にせず、屈伏するまで戦うべきだ」政府側は 一致して 打ち切り論
▽参謀本部は 戦力の限界を 感じていた
多田(参謀次長)「中国側の最終的確答を待たずに長期戦に移ることは、絶対に避けるべきだ。もっと具体的に示し、また条件を緩和してでも、あくまで交渉を継続して和平を成立させるべきだ」
▽最後は 同じ陸軍同士 杉山と多田が 真っ向対決
▽広田が「統帥部は外務大臣を信用出来ませんか」
米内も「政府は外務大臣を信用しております。統帥部が外務大臣を信用しないということは不信任である。政府は総辞職のほかはない」
▽正午になっても 結論が出ず 休憩に
▽秩父宮少佐(参謀本部参謀)が 多田を 訪ねてきた

秩父宮は事変早期解決を願っていた

「日本が武力一点張りでなく道義を以て臨むなら、国民政府もこれに応えるのではないか。国家百年のためにも、早期和平を図るべきだ」か。華南に海軍基地として、永久に占領地を持つ必要はないのか」
風見は和平を成立させるには、満州国承認、反日政策放棄ぐらいの、大まかな条件にしないと話し合いにもなるまい。そう思って「こういう条件では、和平は到底成り立まいと思うが、閣僚諸君はどう思われるか」
責任者の広田は黙ったまま。米内が「和平成立の公算は、ゼロだと思う」広田が初めて「まあ三、四割はありはせぬか」杉山「四、五割、いや五、六割はあろう」風見は「和平は、出来ても出来なくても構わぬというのなら別だが、是非とも成立させたいなら、これなら出来るという見込みのある条件を決めるべきではないか。成立が疑わしいような案では、閣議の幹事役として閣議提案を引き受けるわけにはいかない」練り直しを求めた。

石射　猪太郎(いしい・いたろう)
明治20(1887)～昭和29(1954)福島県生まれ。昭和12年外務省東亜局長。オランダ公使、ブラジル大使を経て敗戦時、ビルマ大使。著に「外交官の一生」

多田の涙ながらの反論

「明治天皇はかつて伊藤博文公が辞めたいと言った時、『朕に辞職なし』と仰せられた。この国家重大な時に、政府が辞職するなどとは、いったい、何事でありますか」

秩父宮　雍仁親王(ちちぶのみや・やすひとしんのう)
明治35(1902)～昭和28(1953)大正天皇の第二皇子。陸軍少将。参謀本部勤務、南支派遣軍参謀。昭和15年肺結核発病、長い間療養生活。日本陸上競技連盟・日本ラグビー協会総裁

▽秩父宮は 打ち切りか 継続かの論争を
御前会議にかけて「陛下の清らかな御心の鏡に映して、その御裁決をお願いすべきだ」
▽多田は「如何に国家の重大事とは申せ、文武当局の意見が合わぬとて、陛下の御裁決を仰ぐというのでは、一切の責任を陛下に負わせる態度であり輔弼の責任を放棄する違憲の行為です。殿下の御意見でも、この件ばかりは従いかねます」
▽多田は 孤軍奮闘したが
夕方になっても 結論が出ず 再び休憩に
▽軍務局長 陸相秘書官が 多田を訪ねてきた
「このままでは内閣総辞職となり、内外に及ぼす影響は重大で、責任は統帥部にかかってくる」
▽政府側の圧力に ついに 多田も折れ
「今日の会議に同意することは出来ないが、反対もせず、政府に一任する」
▽近衛首相は 終始沈黙 成り行きに任せた

「軍配は近衛が握っていた」

佐藤賢了中佐(軍務課政策班長)は、「陸軍が一致して打ち切り論を唱えて政府に迫ったのなら別だが、用兵の主である参謀本部が継続を唱え、陸軍は真っ二つに割れていたのだ。その軍配は近衛が握っていた。もし近衛が、どうしても和平しなければならないと思うなら、その軍配を参謀本部にあげさえすればよかったのだ」

▽広田外相が 打ち切りの 先頭に立ち
米内が「内閣総辞職」で
多田を 押さえ付けた責任は 大きかった

●近衛内閣は16日、ディルクセン大使に交渉打ち切りを通告、「国民政府対手トセス」と声明
▽国民政府と 戦っているのに
それを 相手にしないで
どうやって 解決しようというのか
▽元老 西園寺公望は 目をむいて怒った
「大きな失策だ。日清戦争にしても、李鴻章をつかまえたからこそ、話が出来たのだ。相手にしっかりした者をつかまえて、それと話をつけることが定石ではないか」

河辺は回想録に書いている

秩父宮は「よく分かりました」と、多田に上官に対する敬礼をして出て行かれた。「多田次長は、やがてぽつんと呟くように言った。『ありがたいことだ』と。時刻は午後二時であった」

敗戦の時、鈴木貫太郎首相は

御前会議で、聖断を仰いで戦争を終結させた。敗戦必至、国家の存亡がかかっていた。形の上では勝ち戦、多田もそこまでは決断がつかなかった。

鈴木　貫太郎(すずき・かんたろう)
慶応3(1867)～昭和23(1948) 千葉県関宿藩代官の子として大阪・和泉生まれ。海軍大将。連合艦隊長官、軍令部長を歴任し、昭和4年侍従長。二・二六事件で瀕死の重傷。19年枢密院議長。20年首相に就任し、聖断により戦争を終結させる

佐藤　賢了(さとう・けんりょう)
明治28(1895)～昭和50(1975)石川県生まれ。陸軍中将。昭和4年米国留学。16年軍務課長、17年軍務局長。19年支那派遣軍参謀副長。A級戦犯で終身禁固刑。31年出所。その後東急管財社長

帝国政府声明(1月16日)

「帝国政府ハ南京攻略後尚ホ支那国民政府ノ反省ニ最後ノ機会ヲ与フルタメ今日ニ及ヘリ然ルニ国民政府ハ帝国ノ真意ヲ解セス漫リニ抗戦ヲ策シ内人民塗炭ノ苦ミヲ察セス外東亜全局ノ和平ヲ顧ミル所ナシ　仍テ帝国政府ハ爾後国民政府ヲ対手トセス帝国ト真ニ提携スルニ足ル新興政権ノ成立発展ヲ期待シ是ト両国国交ヲ調整シテ更正支那ノ建設ニ協力セントス」

▽東久邇宮も 日記に 周仏海(国民党宣伝部長)の言葉
「蔣介石をして大いに憤慨せしめ、彼をして最後まで抗戦する決心を固めさせてしまった」

「相手」に「対」の字

声明文を作ったのは佐藤中佐だが、外務省が何とか表現を弱めたいと「否認ではなく、対話する相手でない」という意味で、「対」の字を申し入れた。ところが2日後には陸軍省の要求で「否認すると共に、これを抹殺せんとするものである」との強い補足説明が出てしまった。

その背景には、北支那方面軍が南京陥落の翌日(12月14日)北京に作った中華民国臨時政府を守り立てて行く。蔣介石政権は地方の1政権に過ぎず、代わって中央政権にしようという、陸軍の意向が働いていた。王克敏を行政委員長にしたが、日本人顧問が実権を握り、日本の号令一つで動くようにする傀儡政権。昭和15年3月、南京汪兆銘政権に吸収された時、王克敏は汪兆銘に言ったという。「私は今日本軍に捨てられるが、次は貴方の番ですよ」

●和平のチャンスを逃し、昭和13年から長期戦体制
▽軍需優先の「物資動員計画」1月16日 閣議決定
対象品目は96「代用品時代」に

東京朝日新聞の見出し(6月29日付)

もめんよサヨナラ！ 我れにス・フあり
戦争だ、着けよ国策の衣裳

▽スフは「粗悪品」木炭車は「グズ、のろま」の代名詞
▽4月1日には「国家総動員法」公布
日本の総力を 戦争遂行に 向けるため
政府に 予め 強力 広範囲な統制権限

東京オリンピックも「幻の大会」に

ＩＯＣ(国際オリンピック委員会)は3月15日、昭和15年の東京開催、冬期大会も札幌と決めたが、競技場建設の鉄材が手に入らない。5,300トンの一部を木材にし600トンにしたが、それさえ無理とあって、7月15日の閣議は「戦時下」を理由に中止。

西園寺 公望(さいおんじ・きんもち)
嘉永2(1849)～昭和15(1940) 京都生まれ。九清華家の出。文相、枢密院議長。明治36年政友会総裁。39年首相。44年再度首相となり、陸軍の2個師団増設要求を拒否して総辞職。晩年は、最後の元老として国際協調に努め、後継首相を奏請

李 鴻章(り・こうしょう)
1823～1901 清国末期、太平天国の乱を鎮圧し直隷総督兼北洋大臣。25年間、外交の実権を握り、日清戦争で清国全権として下関講和条約を結ぶ

東久邇 稔彦(ひがしくに・なるひこ)
明治20(1887)～平成2(1990) 京都生まれ。陸軍大将。大正9年フランス留学。航空本部長、防衛総司令官歴任。敗戦後初の皇族内閣を組織、戦後処理に当たる

周 仏海(しゅう・ふっかい)
1897～1948 京大卒。国民党宣伝部長を務め、汪兆銘と共に重慶を脱出、南京国民政府樹立に参画。戦後逮捕され獄死

王 克敏(おう・こくびん)
1873～1945 清国末期、留学生監督として8年間在日。中国銀行総裁。昭和12年中華民国臨時政府行政委員長。戦後、漢奸として逮捕され自殺

汪 兆銘(おう・ちょうめい)
1883～1944 字は精衛。日本に留学し法政大卒。孫文の下で革命運動に従事。蔣介石と合作政権を作り、行政院長。支那事変中に反共親日の和平運動を起こし昭和13年重慶を脱出。15年、南京に設立された国民政府主席。名古屋で病死

「黙れ事件」

衆議院で3月3日、国家総動員法案の

▽日増しに窮屈になる 暗い現実を 紛らすように
双葉山69連勝 松竹映画「愛染かつら」に 熱狂
「花も嵐も踏み越えて」の主題歌が 大流行
続編 完結編合わせて 観客動員1千万人

●近衛も、「対手トセス」の誤りに気付くのに、時間はかからなかった

▽「相手にする」ため 内閣改造
一番の責任は 自分にあるのに
悪いのは 杉山陸相 広田外相となる

▽杉山更迭の希望は 閑院宮(参謀総長)に伝えられ
最後は「辞めた方がいいぞ」と 強引に引導

意中の陸相は板垣征四郎中将

石原は不拡大方針だったから、中国政策転換のため、「同志の板垣なら不拡大を実行してくれるだろう」 使者として板垣と親しい古野伊之助(同盟通信社幹)を、板垣の第5師団が戦っている徐州の戦場に送り、就任の内諾を取り付けた。

▽宇垣は 外相就任に 4つの条件
①内閣の統一強化②対中国外交の外務省一元化
③国民政府と和平交渉の再開④そのためには
「対手トセス声明」にこだわらないこと

▽近衛も「あの声明は余計なことを言ったのですから。しかし、うまく取り消すように」

▽近衛は 板垣の親任式(6月3日)を 終えると
「これで事変の拡大を防ぎ、一挙に解決を図ることが出来るかも知れない。随分苦労したが苦労のし甲斐があった」 大変な はしゃぎ様

板垣の誤算

近衛の「板垣執着」を知った梅津は、先手を打って次官を辞任、次官には東条英機。板垣が石原を次官にしたくても、なったばかりの東条を代えるわけにいかない。東条は「カミソリ東条」の能吏ぶりを発揮し、板垣は完全にロボット、陸軍の強硬意見を代弁するだけに。

近衛は、板垣のことを天皇に「会ってみたら、ボンクラな男でした」 天皇も「近衛はすぐ変わるね」と苦笑されたという。

説明に登壇した佐藤中佐が延々と政策論をぶった。政府委員でなく、単なる説明員だったから、宮脇長吉(政友会)が「委員長、この者にどこまで答弁させるのですか」遮ると、激しい野次に頭にきていた佐藤が「黙れ！」と一喝した。日頃、軍部に低姿勢の議員も憤慨して大騒ぎになったが、翌日、杉山陸相が遺憾の意を表して落着。

軍部全盛、議会の権威失墜を象徴するような出来事だった。

板垣 征四郎(いたがき・せいしろう)
明治18(1885)～昭和23(1948)岩手県生まれ。陸軍大将。昭和4年関東軍参謀、石原と満州事変を起こし「知謀の石原、実行の板垣」と。第5師団長から13年6月近衛内閣陸相。朝鮮軍司令官の後20年第7方面軍司令官。A級戦犯で刑死

古野 伊之助(ふるの・いのすけ)
明治24(1891)～昭和41(1966)三重県生まれ。AP通信東京支社給仕となり、大正3年国際通信に入社し北京、ロンドン支局長。日本新聞聯合を経て、昭和11年同盟通信常務理事。戦後、共同通信理事

西園寺の言葉

「近衛は道具立てのみに一生懸命だが、もっと全責任を負って、自ら敢然としてやることだ」

東条 英機(とうじょう・ひでき)
明治17(1884)～昭和23(1948)東京生まれ。陸軍大将。関東軍参謀長を経て昭和13年陸軍次官。15年近衛内閣陸相。16年首相に就任し陸相、内相を兼任。憲兵政治、翼賛選挙で独裁体制を固めたが、戦局悪化。参謀総長も兼務したが19年7月サイパン陥落で総辞職。戦後、拳銃自殺を図り未遂。A級戦犯として刑死

●宇垣も、わずか4ヵ月で外相辞任

▽就任早々 外国人記者団との会見で
「対手トセス」声明の 修正を示唆した

▽孔祥熙(行政院長)の秘書喬輔三が 6月26日
香港総領事 中村豊一を 訪ねてきた

▽7月19日まで 6回の会談で出した 和平条件は
①満州国は日満中三国条約締結により間接的に承認する②共産党との関係は清算する③華北の特殊地域化や賠償金支払いは難しい

▽五相会議(首・外・蔵・陸・海相)では
「蒋介石の下野が交渉開始の前提条件」

▽「対手トセス」の看板を すぐには
下ろせなかったのだろうが 重い足枷に

▽孔祥熙は「蒋介石が身を引けば、国内を纏めるのが難しくなる。自分が全責任をとって下野する」

▽宇垣も 下野要求を外させようとしたが
陸軍の反対で ダメだった

陸軍でも下野問題で論争

陸軍省・参謀本部の会議で堀場一雄少佐(戦争指導班)は、「蒋介石を事前に下野させた場合、我々は一体誰を相手に停戦するのか。中国で停戦出来る実力者は蒋介石しかいない。しかも、停戦後に蒋介石を下野させるかどうかは 、あくまで中国の内政問題で日本が干渉すべきことではない」しかし東条次官の「ならぬ。陸軍大臣の命令としてもよい」で斥けられた。

▽孔祥熙は 9月1日 交渉打ち切りを通告

▽宇垣は 孔祥熙との洋上会談を計画
五相会議の了解も 取付けたが
その宇垣が 9月30日 突然 外相を辞任

▽宇垣辞任は「興亜院」設置問題だった

●陸軍は、汪兆銘担ぎ出し工作を進めていた

▽傀儡政権基盤は弱く 重慶の抵抗も強い
汪兆銘を離脱させ 蒋介石政権分裂を図る

▽影佐禎昭大佐(陸軍省軍務課長)は 汪兆銘派と密かに連絡

▽高宗武(前亜州司長) 7月来日 板垣陸相らと会見
宇垣には 一切内緒 ばらばらな和平工作
明確な国策の なかったことが分かる

孔 祥熙(こう・しょうき)
1881～1967 国民政府行政院長。財政部長など財政・金融関係の要職を歴任。妻は蒋介石夫人宋美齢(そう・びれい)の姉

堀場 一雄(ほりば・かずお)
明治33(1900)～昭和28(1953)愛知県生まれ。陸軍大佐。昭和12年参謀本部戦争指導班勤務。支那派遣軍、南方軍参謀などを歴任。著に「支那事変戦争指導史」

興亜院

北京・臨時政府に続き昭和13年3月、南京に中支那方面軍の指導で中華民国維新政府が作られた。陸軍は、新興政権や占領地の国策会社を指導する統一機関が必要だ、と主張した。外務省から中国問題を取り上げようというもので、宇垣は反対したが、近衛が「外交一元化」の約束に背いて賛成したため辞任した。長男一雄は「大命拝辞の時よりも、外相辞任の時の方が、おやじは自殺するのじゃないかと思った」と話している。

影佐 禎昭(かげさ・さだあき)
明治26(1893)～昭和23(1948)広島県生まれ。陸軍中将。昭和6年以降、参謀本部支那課勤務。13年陸軍省軍務課長。14年支那派遣軍総司令部付となり汪政権工作を担当。第38師団長(ラバウル)で終戦

高 宗武(こう・そうぶ)
1906～没年不詳 昭和3年来日し、九州大、東大卒。10年汪外交部長の下で亜州司長。13年11月、日華協議記録に調印したが、日本の要求に反発して15年香港で交渉内容を暴露。のちアメリカに亡命

▽近衛内閣は 11月3日「東亜新秩序」声明
「国民政府といえども、新秩序建設に
参加するなら、拒否するものではない」
汪兆銘への 誘い水だった
▽11月20日「日華協議記録」に 調印
▽汪兆銘は 12月18日 飛行機で昆明(雲南)へ脱出
▽ハノイに着いた汪兆銘は 蒋介石に和平勧告
蒋介石は 汪兆銘を反逆者として 党籍剥脱
▽蒋介石の声望は 圧倒的で
汪兆銘についてくる者は 少なかった
▽汪兆銘は 15年3月30日
南京に 国民政府を 樹立したが
協議記録で約束した「2年以内撤兵」が
実行されないのを 悩んでいたという

●漢口、広東を占領、旗行列に沸いたが…
▽日本が 占領したのは
大都市という点と それを繋ぐ鉄道の線だけ
民心を掴む 面で抑えるまでは いかなかった
▽中国には 24個師団が展開し
満州(8個師団) 朝鮮(1個師団) 国内は近衛師団だけ
台湾は 軍司令部はあっても 動員可能師団ゼロ

●近衛内閣は昭和14年1月4日総辞職

堀場少佐の嘆き

「近衛総理は百万の大軍を野曝しにして
逃亡せり。斯くして支那事変何処に行く」

▽支那事変の8年間は 早期に処理しようとして
躓き続けた「失敗の歴史」だった

東亜新秩序声明

「帝国ノ冀求スル所ハ東亜永遠ノ安定ヲ確保スヘキ新秩序ノ建設ニアリ」

堀場は「支那事変戦争指導史」に

第一に挙げているのが、政戦両略を統一した戦争指導力の欠如。支那事変中に内閣が代わること5度、太平洋戦争の間に4度に及び、方針の一貫性がなかったことを指摘している。
「全体として誰が一貫して責任を負うべきやを借問する場合、事態は自ずから明瞭なり」
中国は、蒋介石ただ一人だった。